

李花集成立考

清 沢 宏 彰

一

南北朝の対立という悪条件の中に立たされながらも南朝方の手によって成った新葉和歌集の撰者宗良親王の序の中に、「上元弘の初めより下弘和の今にいたるまで、世は三つぎ、年は五十年の間、かりの宮に従ひ仕うまつりし」人々の歌集であることが述べられているように、後醍醐・後村上・長慶の三天皇の下、吉野朝廷に参じた人々の、五十年にわたってできた歌集であることが記されているが、実はそこに新葉和歌集の成立事情が隠されているのである。

南北朝時代の勅撰集

新千載和歌集 新拾遺和歌集 新後拾遺和歌集

の三集の撰者たちと宗良親王とは縁故があるにもかかわらず、この三集と宗良親王との関係は、全く何も見られなかった。

北朝の撰集に南朝の人々の歌が加えられなかったわけ、北朝の勅撰集に南朝方の歌が全く採択されなかったことから、宗良親王自

から発意し、これが南朝方の准勅撰集たる新葉和歌集の成立動機となった。

李花集に

続後拾遺撰び侍りし頃、立親王以前名字などんぎ侍りて思ひの外に作者にも加はり侍らざりしに、今度風雅集とかや撰ばるるよし聞えしかども、今は又身のよそに覚え侍りしに、あらぬさまなる撰者どもにて為定卿はもれ侍りぬるなど聞かへ、此の道もなくぬる心ちしてなげかしく覚えしかば、歌つかはし侍りし次に。

いかなれば身はしもならぬ言の葉のうづもれてのみ聞えざるらむ此の度はかももらすとももしは草なかなかわかのうらみとはせじとあることから察するに、勅撰集が作られること、師の為定がその撰者になることなど胸中に思い、そのことを期待して詠んだ歌を集めておいたと思われるものがこの李花集の中にいく首かある。しかし、宗良親王の期待に反して、為定がその撰者からもれたという事実から、親王の歌が勅撰集の中に一首も載せられなかった。宗良親

王の意中には非常な不満がもたれたのである。こうした親王にとつては、北朝方の歌集が大いに不満であったこと、後村上天皇の在位中に、撰集の志があり、それも成し遂げられなかったことなどがあつたりした頃、南朝方の准勅撰集をと、ひそかに念じ出していた。

李花集に

御子左大納言の許より、つねに世の中のあるかひなき事をのみ申しながらさまさまに頼みおくべき行末のあらましごとをなむまつ事にてあかしくらすよし、たのもしげにのみ申し侍りしが、かきたえおとづれなくしておぼつかなく侍りしに、さまなかへてゆゆしくいたはりけるよし聞きしかば、わざと人をつかはし侍りける次に、なにとてかくは申し侍るとて

ゆく末を猶もたのまでさのみなど世をうき物と恨みはつらむ

返し

かくてこそ猶行末もたのまるれ今さら世をば何かいとほむとあることからわかるように、為定が出家してしまったことの遺憾の意を宗良親王はもらしている。そこで宗良親王は自作の歌を集めた一部を李花集としてまとめ、

いづ方の風の便りも絶えはてておぼつかなく侍る折ふし住吉殿より御使ありて、この程うちつづき御悩にて御心くるしかりつるやうなど仰せられし御文に「めぐりあはむかぎりぞしらぬ命だにあらばとたのむ程のはかなき」とありし御返事に

めぐりあはむ憑みあるべき君が世に独り老いぬる身をいかにせむという、後村上天皇の意志を継いで、いよいよ新葉和歌集のための努力が成されたものと考えられる。

日本文学大辞典によると、宗良親王は弘和元年（一三八一）十二月以後、元中六年（一三八九）以前、すなわち七十才から七十八才の間に亡くなった（八代説）と見られるから、李花集もその亡くなる前後に完成したのであろう。とあるだけで、はっきりした李花集の成立年代が出ていない。今日の文学史では李花集は新葉和歌集成立後に成つたというのが定説となっている。新葉和歌集の成立にいたつては、その序文によつて弘和元年十二月三日と明記されているのでなんら問題のないところである。ところで、李花集となると少しも成立年代はわからない。李花集詞書のいくつかの中に、延元・興国・正平・建徳の年代の順がみられ、こういった記述の型が自伝的内容を持つときえ思えるのであり、最後の建徳は、李花集最後にある宗良親王のもとへ弟宮懐良親王が九州から送つて来た歌の詞書にあるものである。そこには建徳二年と書かれている。延元の代で李花集に出てくる五年・四年には後醍醐天皇崩御の年、南方紀伝などの史実と比較しても一年の差ですむから、たとえ興国年代にもこのずれが及んでも、現に問題にしようとしている成立年代までの影響はまったく皆無である。

また、京都醍醐三宝院に蔵する宗良親王の信州大河原終生を記した古い覚書があるが、

大草の宮の哥

信劬文永寺密乘院の東向広椽二畳を敷て池の蓮をながめて宗詢法印の手跡にて写之

二十余廻の春も都のよそに過ぬる事なと歎侍しころうくいすなきて

ことし我が春をしらせよ鶯もしるしなきぬやさのみなくへき

興国五年信濃国大川原と申山のおくに籠侍にたたかりそめなる山かつのかきはわたりみならはぬ心地し侍にやふくわかぬ春のひかりまちえぬうくいすの百囀もむかし思出られしかはかりのやとかこふはかりのくれ竹をありし園とやうくひすのなく春をへてあひやとりせし鶯も竹の園生にわれしのふらん
信濃にて百首哥よみ侍しに霞を
かすめたゝいつれ都のさかるともみゆへき程の旅のそらかは

天文十九年在国の時写之也大草宮と申は南帝の宮にて御座信州より度々御出張終に事もとゝかて大草と申山の奥のさとの奥の大川原と申所にてむなしくならせ給こそあはれなる事共なり
此の外大巻一卷あり濃州まで切のほられたるありさま色々の事ともあそはし御哥数十首悲涙をさつかたき物なり

これによると、新葉和歌集撰集以前に幾巻かの集があったものと思われるし、これに載っている四首は、李花集春の部に収められていることからして、「大草と申は南帝の宮」とある大草宮が、宗良親王のことであるは明白である。その上、今も大草という地名は残っているのだ。こうした覚書は宗良親王死去地の一説の寄り所とはなるが、李花集の成立にははっきりした示唆を与えてくれているとはいえない。ところが「此外大巻一卷」はやはり李花集のことであろう。天文十九年という後代のこの古書の意味している「大巻」はおそらくこの四首が李花集春の部のものであれば上巻になる。したがって、「此の外大巻一卷」は、李花集下巻のことになり、雑歌の建徳二年の歌を最後として、上・下二巻に李花集がまとめられていたことに

なる。

二

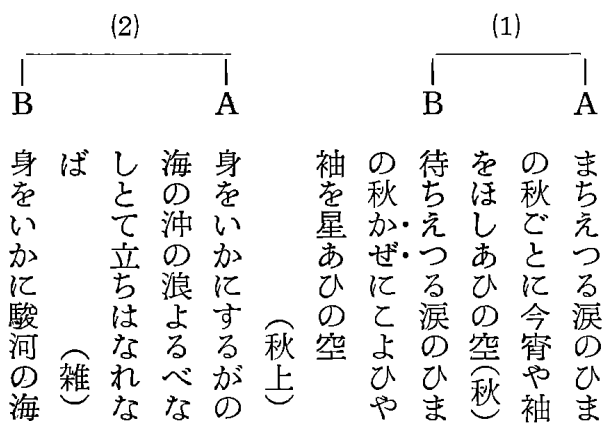
新葉和歌集の歌人別歌数を探り出してみると、新葉和歌集歌人中最多の入撰歌は、後村上天皇の百首であり、ついで宗良親王の九十九首という数が示される。この二人の歌数の差はたった一首であるが、そこには重大な意味がこめられている。すでに前述してあるのだが、新葉和歌集撰集の動機は生前勅撰集をとの悲願を持っていた後村上天皇の宿願を遂げようとする意図、南朝にも一つの勅撰集を残しておきたいとの理由から、宗良親王は新葉和歌集における後村上天皇の地位を最高位にしようと考えた。その後村上天皇への追慕と顕彰が、その重要な一首ちがいのの中に含まれているのである。したがって宗良親王自身の歌の数多くを「よみ人しらず歌」としたのは、入撰歌数の上で後村上天皇に最高位を与えた宗良親王の考えであったので、新葉和歌集の中に出てくる「よみ人しらず歌」の中に宗良親王の歌が多くあることは当然と言えよう。

さて、新葉和歌集に宗良親王の家集李花集から総数百首がとられているが、宗良親王と明記したものは四十四首、「よみ人しらず」としたものの五十六首というように、数の上では「よみ人しらず歌」の方がはるかに多くなっており、このことが前記の事柄を裏づけているものと言える。

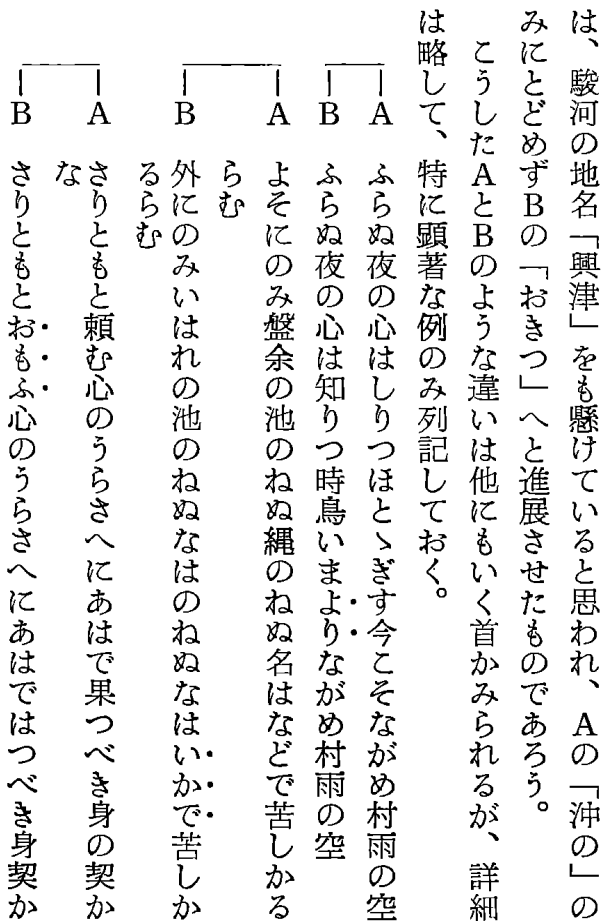
新葉和歌集には李花集から多くの歌をとっていることや、李花集では詞書があるのにもかかわらず、新葉和歌集では、「題しらず」

巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
総数	3	3	6	4	3	4	1	8	0	0	18	16	7	11	5	1	4	1	1	0	96
李花集から	2	1	1	2	1	2	0	5	0	0	11	4	4	6	3	1	3	0	0	0	56
千首歌から	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	4	1	2	1	1	0	0	0	0	0	12
住吉三百六十番歌合	0	1	3	1	2	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	11
その他	1	1	1	1	0	0	1	1	0	0	3	1	0	3	1	0	1	1	1	0	17

新葉和歌集「よみ人しらず歌」出典別歌数



「よみ人しらず」とされた例が多いことから、李花集なくして新葉和歌集を理解することができないといっても過言ではない。李花集・新葉和歌集の両方に出現している歌の中でも少し表現の違うのが何首か見られるが、ここで少しく述べてみよう。李花集に出ているものをAとして、新葉和歌集に出ているものをBとして、以下比較してみる。



のおきつ浪よるべなしとして立ち放れなば (離別)

(1)では、この歌が七月七日(七夕)に詠まれたものとわかれば意味はわかる。AとBの違いは、A「秋ごとに」B「秋かぜ」である。「秋ごと」より「秋かぜ」の方がAの意味を含むと同時に、秋吹く風が作者の心をいっそうわびしいものに表現している。そんな効果を出そうとして改作したものでしょう。

また、(2)のA「沖の」とB「おきつ」の違いであるが、この一首は李花集においても新葉和歌集においても最も優れたものの一つであり、懸詞・縁語の技巧も複雑ではあるが、それが少しも不自然ではない。「沖の」を「おきつ」にした理由を考えるに、「おきつ」を考えてみるとよい。Aの場合の「沖」は、Bの場合と同様「沖」の意味の中に懸詞として波が「起きる」を含んでいる。その上Bでは、駿河の地名「興津」をも懸けていると思われる、Aの「沖の」みにとどめずBの「おきつ」へと進展させたものであろう。

こうしたAとBのような違いは他にもいく首かみられるが、詳細は略して、特に顕著な例のみ列記しておく。

な

A 山ふかく尋ね入りてぞまがひなき仏の道はしるべかりけ
る
B 山ふかみ尋ね入てぞまよひなきほとけの道はしるべかり
ける

A いにしへも掛けし衣の珠なれどうらめづらしく今おもふ
かな
B いにしへもかけし衣の玉をなどうらめづらしくいま思ふ
らむ

これらは、みなA↓Bへの推敲、すなわち李花集から新葉和歌集へとった何首かに推敲を加えたことの意味として解釈される。したがって新葉和歌集が成立した前に李花集成立が考えられるのであるが、こうしたことがさらに、詞書の中にも現われている。

李花集雑歌の「君がため世のため何か惜しからむすててかひある命なりせば」の一首が、新葉和歌集では「君のため……」となっており、詞書の上でも、

李花集の

戦場に出で侍りし道すがらいさみあるべき事などつはものども
にいひふくめ侍りし次に思ひつづけ侍りし

に対し、新葉和歌集の

同じ頃武蔵国へ打越えてこてさし原と言ふ所におり居て手分な
どし侍りし時いさみあるべきよしつはものどもにめし仰せ侍り
しついでに思ひ続け侍りし

を見れば、李花集の詞書がさらに整理され、まとめられていること

に気がつく。しかも李花集における戦場が、新葉和歌集においては「小手指原」と記されてまでいる。

ここで気のつくことは、李花集には、

(1) 君がため世のため何か惜しからむすててかひある命なりせば

(七三九)

(2) 思ひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむ物とは(七

四〇)

の順序で出ているのに、新葉和歌集となると、これが逆となり、(2)が先で(1)があとになっている。その上、(2)の一首の詞書についても李花集では「遠国に久しく住み侍りて今は都の手ぶりもわすれはてぬるのみならずひたすら弓馬の道にのみたづさはり侍りて征夷將軍の宣旨など給はりしも我ながらふしぎに覚え侍りければ、歌よみ侍りし次に」とあるに、新葉和歌集には「同じ頃武蔵国云々」となっていることからして、この二首は、いずれも「同じ頃」の作といえよう。

正平七年(一一五二)足利尊氏が弟義直を殺した年、後村上天皇はすでに出家していた宗良親王を征東將軍に任命し、東国の軍事を司らせ、彼の軍は同年二月武蔵国の小手指原で、尊氏の軍と一戦を交えている。してみれば、このいきさつから考えて、詞書のつながりは、李花集の場合やはり不自然と言えようし、新葉和歌集の詞書の中には小手指原の地名も記され、かつ時間的にも前後の關係が説明づけられるのである。

こういったこの二首が、李花集においても、新葉和歌集においても続けて載せられていることは、新葉和歌集が李花集そのままの移

しでなく、「君がため」を「君のため」としたと同時に新葉和歌集の撰者としての、准勅撰集への宗良親王の態度を物語っていると云えるのであり、李花集から新葉和歌集への成立過程の位置づけをも意味しているものである。

李花集の詞書の中に、多くの贈答歌が含まれている。もちろん、詞書の中のみとは限られないが、こうした贈答歌は雑歌にあり、その相手になっている者として、北畠親房や新待賢門院など、宗良親王と交渉のあった人たちである。ところで恋歌の方というに、恋歌の詞書の中には、北畠親房の数首が見られ、みな「中院准后みせ侍りし歌中に」の書き出しである。恋歌の中ではこの親房の他には一首も宗良親王以外の人の歌が見られない。宗良親王が人の許へつかわした贈答歌は、

信濃国伊那と申す所に侍りて人の許へ申しつかはし侍りし
山高み見つゝ我がこしはゝき木のあはでふせやに迷ふ恋かな

思へどもつらき人に申しつかはし侍りし

さりととも頼む心のうらさへに逢はではつべき身の契かな

いかなる夢の名残にてかありけむ人の許へ申しつかはし
夢だにも忘れがたきはあるものをありし現のさてややみなむ
などのように、宗良親王の方から一方的に贈ったもののみで、これらに對しての返し歌が一首も見られない。そうかと言えば、次のようなのが一首だけ見られる。

人の許よりこよひの月はみるかと申し侍りし返事に

是ならぬ忘れがたみもあるものを月はながめじくもりもぞする

これは、宗良親王の返事の歌で、「人の許より」よこされた歌の返事であって、相手がだれか、またそれぞれの歌が、どんな歌だったのかまったく不明である。

こうして見ているに、新葉和歌集の九三九、九四〇、九四一の歌を考察してみると、そこには宗良親王へ女性から返歌の来ていることがわかる。

新葉和歌集恋歌四の中に、

題しらず

よみ人しらず

九三九 などつらき心の吾に変わるらん人を見るこそ鏡と思ふに

心にもあらで離れ侍りけるをそのまにて年月も多く積りにける女のもとへ申つかはしける

九四〇 いかにせむ別れは年を隔つれど見し面影は身をも離れずかへし

九四一 かくばかり猶面影は添ふものを別るる人に見えけるぞ憂き

とあるが、この三首は全部「よみ人しらず」になっている。ところが、九三九の歌は李花集の恋歌の中に「寄鏡恋とて」と詞書してあることから、これら三首のうち、九三九、九四〇の二首は宗良親王の歌であることがあきらかになるのである。したがって、九四一の歌は九四〇の歌に對しての「かへし歌」になるから、宗良親王に對しての「かへし歌」となるのである。

すなわち、九四〇と九四一の二首は宗良親王と一女性の間で交わされた贈答歌になるわけだ。李花集中にこうした女性からの「返し歌」が載せられていないから、宗良親王へ返し歌が全然なかったと

いうことにはならない。李花集ではそれを控えていたということだ。新葉和歌集にはこうして載せられているのだから。よみ人しらず歌に右の三首がされているのは、前述のように後村上天皇を集中最高位に現わそうとした宗良親王の深い配慮のほかに、彼自身のもとへ女性からの返歌が届いたことなどをあらわにすることを控えたためでもあろう。

九四〇の歌の詞書を見ると、二人はお互いに久しくあっていないことがわかる。

九三九の歌は、李花集恋歌一五四首のうち、最後から十四首目に出ている。そこから、李花集の最初に出てくる恋歌などの隔たりはかなりのものになる。その時間的差から考えて、九四〇の詞書の中に「年月も多く積りにける」というのは、

信濃国に行きつぬればおくりもの返し侍りし次に、するがなりし人のもとへ申しつかはし侍し

富士のねの煙を見ても君とへよ浅間のたけはいかがもゆるととあるごとく、「かへし歌」の主は駿河の国の女性ではなかったろうかと推される。その人が、後々まで宗良親王の面影の人と考えられるのは、李花集恋歌の最初の方に

富士のねやたえぬ思ひの夕煙きえなでさのみ何くゆるらむ
我がつつむ胸のけぶりの立ち出でて曇りふたがり空も見えしを
しられじな富士の高ねの雲がくれむせぶ煙は空に立つとも
あさましや浅間のたけも近ければ恋の煙も立ちやそふらむ

から衣胸のあたりにたつ煙すゑをば富士の高ねとも見よ
というふうに富士を歌い込んだいく首かの恋歌に結びつくからであ

る。

こうしてみると、新葉和歌集には宗良親王への「かへし歌」があるのだが、李花集にはない。だからといって、新葉和歌集より李花集が後に成立したという理由にはならない。

かえって、逆の意味を強めているものと思えてならない。

というのは、李花集恋歌の中で、返歌が一首も見られないということは、新葉和歌集の九四一のような歌が、現に返歌として存在しているにもかかわらず、李花集には返歌が一首も見当らないからである。そればかりか、李花集の初めに見られる恋歌がみな駿河での初恋のものであるからだ。このことは、李花集が歴史的自叙伝的な構成によってまとめられているため、恋歌のみを追求して行けば、いっそう明確な事実とされてくるのだが、ここではそれは略しておく。

三

李花集は南北朝時代の動乱期に、宗良親王が東奔西走の間に成ったものだ。悲痛な体験、切実なる苦悩の結果から詠み出された数多くの歌を中心とした彼の家集である。悲壮な気魄に打たれる歌を多く集めて成ったこの李花集は、全体に渡って長い詞書が記されていることからして、この集が宗良親王の自叙伝的なものであると言っても過言でないことは確かである。これが李花集の歴史的な価値にも通じることになるのだ。詞書の中にある年次の明らかなものは、延元二年の頃を最初とし、興国、正平年間のものをも最多とし、建徳

二年十二月の歌を最後としている。このように年号のはっきりしているものは、特に雑歌の部であって、李花集における雑歌は、その詞書とともに重要な意味を持つている。宗良親王の年令から見ると二十六才から六十一才頃にかかるもので、親王の歌八九九首、他の作品一三首、詞書の中に含まれている歌九四首、計一〇〇六首が載せられている。

上・下二巻、上巻は春歌・夏歌・秋歌・冬歌、下巻は恋歌・雑歌から成っており、その内容たるや親王の生涯をめぐり過ぎ、夢と去った過去の追憶と、征旅に出た時思いに触れたこと、折りに当り詠い、あるいは贈答歌、四季折々の歌および恋歌をまとめたものである。こうした内容を持つ李花集に、南北朝時代に後村上天皇の悲願であった南朝方の勅撰集をという大事について、悲運であったことは記されている。宗良親王が撰者となつて南朝方へ准勅撰集たる新葉和歌集をもたらしした最高の喜びとしての事件を何一つ記していない。この事実が李花集の性格からして、新葉和歌集後に李花集成立ということになれば、当然李花集には新葉和歌集に関する事柄が、たとえ一ページにしろ、いや一首であるにしろ書かれていてよはずではないか。しかし、このことについては何も見るべきがないのだ。

李花集は、親王の流離の生涯の中から生まれた歌を集成した家集であるが、最初から集を目的としていたのかはわからない。そこで考えなければならないのは李花集という歌集名だが、「李」についての歌が一首でもあれば、そこから「李花集」と名づけられたという考えも納得できよう。だが、李花集中に「李」の花に関係した歌

がどこを見ても一首だつて見当たらないのである。歌集名をつけるにこのような理由からつけるだけではないことはもちろんである。李花集の場合やはり別の意味があるのだ。

谷森善臣氏の説によると、

「モト式部卿ト聞エシ頃、書集メラレシ歌ヲ仮用セラレシモノニテ、吏部親王ノ歌集ナル由ノ題名ナルベシ、其李花集ノ終リニ建徳二年九月二十日鎮西ヨリ便宜ニ、中務卿親王『日にそへてのかれむとのみをおもふ身に浮世のことのいとしきかな』ト見エタルハ、征西將軍懷良親王ノ歌ナレハ、当時其親王は中務卿ニシテ、此宗良親王ハ征東將軍式部卿ナリシコトヲ知ルヘシ、今天授三年実為大納言ノ筆述ニ、宗良親王ヲ指シテ、中務ノ宮ト書レシニ依テ思フニ、是ヨリ先キニ懷良親王ハ征西將軍ノ重職ヲ御甥ノ良成親王ニ譲ラレシ時、中務卿ヲモ辞セラレテ、宗良親王式部卿ヨリ遷リテ中務卿ニ任セラレシコトナルヘシ、云云」

ということになる。これは納得のいく説であると思われる。

宗良親王が信濃にいた頃、式部卿であったことは、次の村山文書でもあきらかである。

一見了(中院侍従)
(花押)

村山右京亮信忠事

右去月廿九日、為凶徒池一族等御退治、中院殿当府(越後国府領 城郡ニアリ)御発向之間、相催信義一族等、最前弛參御方、致忠節、令宿直警固上者、下賜御証判、向後為施弓箭面目、恐々言上如件、

正平七年閏二月日

取前参_ニ御方_一、致_ニ忠節_一之条、殊以神妙、弥可_レ成_ニ其勇_一者、式部卿親王令旨如_レ此、悉_レ之以状。

正平七年閏二月九日

(中院)
侍従 (花押)

以上により、宗良親王が式部卿であったことがわかるのである。

新葉和歌集には、中務卿宗良親王となっているが、一方、李花集においては、一番最後の歌の詞書をみると、

「建徳二年九月廿日鎮西より便宣に中務卿親王懐良」とあり、内閣文庫蔵本には「懐良九州宮」とあることよって、当時中務卿は宗良親王にあらざ懐良親王であったのだから、李花集時代の宗良親王は、はっきり式部卿であったことになる。

さて、「李花集」なる書名であるが、北畠親房の職原抄によると式部卿については、次のような説明がされている。

式部省 当_ニ唐吏部_一

卿一人 相当正四位下 七省皆同之
唐名吏部尚書

この職原抄によると、式部卿のことを唐名吏部尚書という。

そこで、式部卿時代に成ったと思われるこの李花集の題名は、式部の集、すなわち吏部の集ということになり「吏」と「李」の発音が同じことから「李花集」と書名づけられたと考えられ、李花集成立のある程度の位置を示してくれているのだ。

李花集が新葉和歌集よりも後に成立しているという説もいくつか見られた。しかし、こうして、李花集新葉和歌集の関係を説明し、書名考にまで及んでみると、それらの考え方に反して、李花集成立が先という考えが生まれてくる。しかも、李花集雑歌の最後の歌の詞書中にある年号「建徳二年」は、李花集の年代順で最も新しいもの、当時の中務卿は懐良親王であったことなどを教えてくれている。併せて、李花集がこの年号で終わっていることは、たとえ宗良親王がさらに多く歌を本集に載せようとした思慮があったにせよ、事実上、「李花集」と書名のつけられた家集としての成立年代を、建徳二年であると示していることになる。

このように、李花集は新葉和歌集成立以前にすでに成立していたと考えられ、新葉和歌集との関係を見て行くにいつそうそれが確かなものとなって行くのである。

宗良親王の生涯はまったく流転そのものであった。その生涯で最もショックを受けた事件は、後醍醐天皇が延元四年(一三三九)崩御した時であった。この頃から吉野朝時代の文学の特色である悲歌が目立って来たのは、あまりにも当然のことかも知れない。新葉和歌集における悲歌性は文学史に一つのジャンルを与えているものである。悲歌は量で代表するものでなく、質で代表されるものと見なければならぬ。新葉和歌集が吉野朝時代の文学の最高峰にあると見成されるのは、その撰者宗良親王自身が、後期半生を越後・越中・信濃・東海地方に竹の園生やんごとなき身をもって都から離れ流転の生涯に身を置き、そこから生まれた歌はおのずから悲歌性が強

(以下18頁へ)

立石寺の蟬	齋藤茂吉
露丸・郷土俳人	茂木 茂
芭蕉庵三日月日記	喜峯 社
鶴岡市史	鶴岡教委
酒田市史	酒田教委
羽黒の俳人図司呂丸	戸川安章
修験道と民俗	戸川安章
羽黒山に於ける芭蕉	戸川安章
三山の文学	工藤恒治
考証出羽路の芭蕉	佐藤 圓
小説出羽路の芭蕉	佐藤 圓
蟬と天の河	佐藤 圓
南坊茶事	成田恒二郎
聞書七日草	呂丸
陸奥衛	桃隣
葛の松原	不玉
随行日記	曾良
月山発句合	路通
笈日記	支考
三山雅集	呂笈
出羽風土記	
羽黒山中興覚書	

(本学講師・昭和8年東洋科卒)

(27頁よりつづく)

まあっており、これらの歌が量より質の面で李花集を通じ、新葉和歌集に反映し、人間宗良親王の精神が生かされているからである。

悲歌とは悲しい歌悲しみを詠ったものであるが、宗良親王の場合南北朝時代の国の乱れを憂え世を嘆き、彼自己の境涯を反省しているもので、そこに悲痛なものが慟哭され、歌が即興的に直感的に詠まれているので、その度がいっそう高まっているのである。

万葉集時代には雄大でおおどかな国を讃える歌であったのに比しこの吉野朝時代では沈痛な悲歌を新葉和歌集に象徴化したのは歴史的必然性でなければならなかったのか。

とにかくも、こうした背景を持つ新葉和歌集は、日本文学史上、その価値を悲歌に持たせている。そして、特異な文学のジャンルの地位を確保している新葉和歌集が世に出る前に、李花集が新葉和歌集成立実現に隠された力を持っていたことに疑いがないのである。

それは、李花集の文学史的位置として、新葉和歌集成立以前にあると考えられることになるし、さらに李花集成立が建徳二年であることにもつながっている。

長野県西筑摩郡三岳村立三岳中学校教諭

(昭和36年度国文科卒)